

贈呈理由

(財)庭野平和財団(庭野日鑛総裁、庭野欽司郎理事長)は、「第20回庭野平和賞」を核問題に関する英国の民間シンクタンクであり、反核平和戦略の権威として知られる「オックスフォード・リサーチ・グループ」(ORG)の所長プリシラ・エルワーズィ博士(59歳)に贈呈することを決定致しました。世界125カ国、約1000人の識者に推薦を依頼し、仏教、キリスト教、イスラム教など7人で構成される審査委員会で厳正な審査を行い、決定したものであります。

「オックスフォード・リサーチ・グループ」は、核兵器の廃絶、武器輸出の削減・規制などを通して世界の安全保障を高めることを目的とした研究機関です。また、このグループの特色は受賞者と主要なメンバーが平和主義を信条とするクェーカー教徒であることです。彼らは特に、過去20年にわたり、全世界で核兵器に関する決定がどのようにして行われ、その決定は誰によってなされるかについて研究を重ねてきました。創始者であるエルワーズィ博士を中心にした非暴力的な手段による紛争解決への研究と提案は、世界中の政府関係者、研究者、NGOに冷静で客観的な視点を与えると同時に、国際的な軍縮交渉にも多大な影響を及ぼしています。民間の研究機関が、一国の核政策の意思決定にまで切り込んでいくという、その知的で粘り強い姿勢は、世界の人々に大きな希望と勇気を与えるものと高く評価されています。

エルワーズィ博士は、多彩な経歴を持っています。アイルランド、ダブリンのトリニティ・カレッジの社会学部を卒業後、北アフリカの難民キャンプで救援活動に従事しました。南アフリカでは、栄養不良を改善する組織のコーディネーターとなり、同国初の人種を問わずに入場できる劇場の立ち上げに協力しました。またフランス・マイノリティー人権擁護グループの責任者を務めたほか、1978から1981年までは、ユネスコの女性問題コンサルタントとなり、国連女性会議でユネスコが発表するレポートを調査・執筆しました。

大きな転機は、1982年、第2回国連軍縮特別総会へ参加した際に訪れました。ニューヨークのセントラルパークでは、数万の人々による核軍縮を求めるデモが行われていました。しかし、国連ビルに戻ると、軍縮への議事は遅々として進まず、デモによって核軍縮を求める人々の声などは全く届いていない状況でした。エルワーズィ博士は、その時の心情を次のように述懐しています。「反対デモに参加する人々と意思決定する人々とのギャップを埋める――

これこそが核軍縮を進展させる重要な一步となるに違いないと思いました。市民グループが、意思決定者に思いを伝える際、私には一つのアイデアがありました。反対を叫んで旗を振りかざしたり、暴力的な行為をしたりするのではなく、真実の関連知識を得た上で、冷静に問題を討議することが必要なのではないか、と」

以来、エルワズィ博士は、地道な調査活動を開始しました。まず「誰が意思決定者であるか」を特定することに没頭しました。情報は、大使館の図書館などでかなり容易に入手できることも判明しました。そして「オックスフォード・リサーチ・グループ」が、エルワズィ博士の自宅で産声を上げるのです。この斬新な試みは、大きな共感を得、資金や人材も整い、半年後には、すべての核保有国と核保有途上国の核兵器に関する意思決定の分析結果、意思決定者の経歴リストが作成されました。

意思決定は、一般的に政治家や議会が行っているように思われています。しかし調査結果によると、現実には、核兵器に関する重要な決定が、多くの場合、一部の専門家、閣僚、官僚によってなされ、政治家や議会には十分な情報が提供されていないという非常に脆弱な現状が浮かび上がってきました。核兵器問題の背後にある「人為的要因」が明らかになったのです。

これらの調査結果を踏まえ、「オックスフォード・リサーチ・グループ」は、次の段階として、現実的に「意思決定の鍵となる立場にある人」との話し合いを目指しました。リサーチだけにとどまらず、対話を通じて問題を解決しようとしたのです。まずさまざまなNGOと接触し、情報提供を行い、個々に意思決定者と出会い、対話を進めるよう提案しました。このプロジェクトは、多くの賛同を得、最終的に70のグループにまで発展しました。エルワズィ博士自身、防衛省や外務省の官僚、軍事計画者、兵器設計者、戦略専門家、政治家と文字通り膝を交えて話し合いました。宗教的な背景もさまざまな中で、対話が進んでいったのは、エルワズィ博士の傑出した人柄があったと言われています。敵対することなく、それぞれの立場を尊重しつつ、信頼を醸成しながら、核兵器廃絶、核拡散防止の方途を共に模索していったのであります。

「オックスフォード・リサーチ・グループ」の問題解決の手法は、常に「非暴力の決意を実行するもの」であり、対話が基本です。人と人との間に信頼感を醸成し、それによって安全保障を図ることが目的です。1992年、兵器取引問題に焦点が当てられた際には、世界で兵器の取引を企画し輸出しよう

としている者、市場に供給しようとしている者など、最も高度な意思決定者50人とコンタクトを取り、意見を聴取。解決策を導くために、専門家と兵器取引当事者との会議を主催しました。会議の結果は公表され、その具体的、現実的アプローチに称賛の声が寄せられました。欧州安全保障協力機構（OSCE）の米国代表は、「この報告書の情報は、私にとって限りなく価値があります。両者を集めて会議を開き、その情報を一つにまとめるという方法は、今まで目にした同様の報告書より、はるかに使用に耐える情報を提供しています。私は多くの情報を得ることができました」と述べています。

以降、「オックスフォード・リサーチ・グループ」は、国内外で安全保障と核拡散問題に関する会議、セミナー、ワークショップを立案、主催し、17カ国以上の国々の政府関係者、研究者、NGOなどを対象に世界的規模でこれらの問題について討議の場を提供してきました。さらに研究成果は、数々の書籍として発刊されているほか、世界中の政府系、非政府系組織によって活用、研究委託されており、その範囲は、国連大学、欧州議会、「核戦争防止国際医師会議」など多岐に及んでいます。

また最近では、紛争現場の最前線で非暴力の手段によって解決を図ろうとしているグループを支援する「ピース・ディレクト」と称するプロジェクトを企画。非暴力に関する訓練資材の贈呈、人材育成・訓練のアレンジ、物的支援、メディアへの働きかけなどを通し、「オックスフォード・リサーチ・グループ」のような「支援グループ」と「現場活動グループ」の有機的連携を目指し、一般市民が様々な型で参画可能なシステムの構築に取り組んでいます。

エルワズィ博士は、クウェーカーの信徒でもあります。「オックスフォード・リサーチ・グループ」での諸活動には、「高潔さ」「質素」「平等」「共同体」「平和（非暴力）」を主な倫理規範とするクウェーカーの宗教的確信が反映されているように思えます。すべての人が神の子としての「うちなる光」を持つという博愛主義に裏打ちされた信念と、真摯で現実的な努力で対立的ではなく、すべてを包み込むような軍縮への新たな流れを生み出しているのではありません。

エルワズィ博士は、言われます。「多様な人々からなる巨大なシステムに立ち向かう時、そしてそのシステムを変え、影響を与えることを望む時、個人では何もできない、とあきらめることは間違っています。少人数の仲間がいれば、一人の決定の結果を、システム全体に劇的に広げ、ついにはその意思決定

を変えることができるのです」と。

核査察問題、核保有国が内包する根本的な矛盾などを考える時、エルワーズィ博士の言葉は、核兵器の全廃に向け、力強くわれわれ現代人の心に響いてまいります。非暴力が、時としていかに大きな力となるか——エルワーズィ博士、そして「オックスフォード・リサーチ・グループ」の活動は、「力」の威力に縋っている現代人に、大きな価値転換を迫っているとも言えましょう。その意味からも、庭野平和財団は、エルワーズィ博士の平和への献身に深く敬意を表し、またこれまでの多大な功績を顕彰すると共に、さらに多くの同志が輩出されることを念願して、ここに「第20回庭野平和賞」をお贈りするものがあります。